

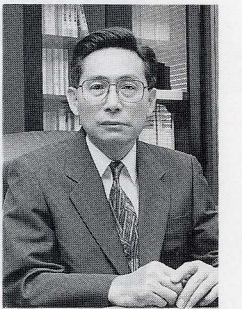
Life's not always what one likes.

理学部長 牟田 泰三

映画華やかなりに頃に「ローマの休日」という映画がきて、若かった私たちも映画館へ観に行つたものであった。当時はまだせりふは英語のまま、日本語の字幕が出ていたのが英会話の勉強にもなった。そこで、シナリオを買ってきて練習しては、また映画館に行つたりしていた。

そのシナリオも引越しを繰り返しているうちに忘れてしまつて、せりふも、もうすっかり忘れてしまつたが、オードリー・ヘップバーン扮する王女が、グレゴリー・ペックの新聞記者に向かって言う文句「Life's not always what one likes」だけはなぜか今でもはつきり覚えている。「人は王女という身分をどのようにみているかは知らないが、王女としての宿命は、自らが好んで選んだものではない。しかし、好むと好まざるに関わらず、この宿命の中で自分の役割を果たして

いくしかないのだ」と彼女は言っていたのである。



考えてみ

ると、こんなに大きなことでもなくとも、大なり小なりこんなことは誰の身にも起こっていることではなからうか。公務員を志望していたけど家業を継いだり、宇宙飛行士になりたかったのに大学で教官になっていたりということもある。自分は研究にしか向いていないのだと思つて研究の道を選んだつもりが、気がついてみたら行政の道にいたりもする。卒業生諸君はこれから社会に出て、必ずしも自分の欲する道が与えられないかもしれない。いや、多くの場合そうである。しかし、与えられた道の中で自らを最大限に生かし、かつ、与えられた道に對してより大きな貢献をするように努めることが、結局は、社会における自己のアイデンティティを確認することにつながるのではないだろうか。

あなたに会えて良かった

理学部 加来幸江・中丸京子



研究室に配属になる前のコンパでの様子

卒業にあたっての思い出というところだが、四年間一緒に過ごした〇五のみんなを抜きは語ることはできない。そこで彼らに大学生生活を振り返ってもらつた。「あなたにとっての四年間を一言でいうと」。

良かった・暇だった・祭り (Festival of Ito)・酒・ラストアバンチュール・青かった・バイトで始り、バイトで終わった・長いようで短かった・フーツ・いろいろ悩んで考えて、大きくなった・サークルやって良かった・切磋琢磨・学校行事中で、くつ汚れた・ロングバケーション。



医の原点を見失うな

医学部長 吉永 文隆

卒業に当たり、今一度ヘーゲルの弁証法を想起し、身の処し方を考えてみるのも意義深い。社会は不断に変化するが、その運動の原因は矛盾・対立する両側面(物・貨幣システムと愛・共感システム、自由と秩序、開発と自然など)の統一と闘争にあり、その構造の質的变化は量的変化(経済成長の鈍化、高齢化・少子化、社会保障費の増加など)によって惹起される。しかし、根源的に必要な要素は積極的に維持され発展するという法則である。

有史以来、科学技術は著しく進歩し、社会構造は大きく変動したが、医学・医療の行動規範の原点である生命の尊厳と健康(a state of well-being)支援の活動は不変であった。この医の原点を常に自覚し行動して欲しい。科学技術には二面性がある。人類の安寧をめざす道、科学技術の社会化は、医の原点に根ざしたものとしなければならぬ。二十一世紀の世直しは、諸君の行動規範に大きく依存している。

六年間を振り返ってみてふと思ふことは、六年間は意外と短かったことである。しかし、その短い学生生活の中で得たものは多い。私は六年間を野球部で過ごし、良い成績は残せなかったが良き先輩、後輩に恵まれ、ともに白球を追いかけ完全燃焼することができた。また、クラスでは、毎年霞キャンパスの学部で行われているサッカー大会に出場し、二度も優勝することができた。その他震災や医学展など思い出は尽きない。また、医学についてはポリクリを通じて実際に患者さんに接し、自分の目指している理想の医師像に少しでも近づけるよう決意も新たにしている次第である。

六年間を振り返って

医学部医学科 水入 寛純

生き返った瞳

医学部保健学科 胃甲優子・和田峰子

「あなたたちの瞳死んじやつてるわよ。どうしちゃったの」で始まつた三年後期。他学部の学生が学生生活を謳歌しているのを横目に過密なスケジュールを強いられ、私たちは心に全く余裕がなかった。

そんな時、授業を犠牲にしてまでも私たちの心の叫びに耳を傾けてくださった教授の最初の言葉がこれだった。この時本当に作業療法士になりたいと思つていた人は、クラスに何人いたろうか。うやむやな気持ちのまま四年次長期実習に臨んだ。そしてその実習で私たちは、「死んじやった瞳」を生き返らせてくれる人たちに会つた。私が落ち込んだ時、黙つて手をつないで散歩してくれた患者さん。自分を否定しがちな私に「生身でいいんだ

感謝

理学研究科博士課程前期 坂井 三郎

いよいよ大学院も修了しようとしている。心躍りながら入学して、早くも六年である。学部生の前半は自由奔放に遊びまくつたという記憶で埋めつくされてしまふそうである。講座に配属されてからは、研究のためとの名目でスキューバの免許を取る。オーストラリアで卒論 沖繩で泡盛を呑みまくるなど、なんて楽しいんだと思ひながら卒論を終えたの思い出す。

しかし、修士課程に入つてから一年目は、研究テーマを見出せず困惑の一年であった。二年目に入り、ようやく研究テーマを見出し

「見える」という状態

理学研究科博士課程後期 藤澤 洋徳

私は今から五年前に広島大学大学院に入学した。毎日毎日、勉強に明け暮れる日々を過ごしていた。その中で「見える」という状態を知った。

ゼミで勉強を始めたばかりの頃は何も分からなかった。ただひたすらに、書いてあることを理解しようとした。書いてあることが断片的に理解できるようになった。それが積み重なると、全体像がおぼろげながら「見える」きた。その後は、部分を見たり全体を見たり、それを繰り返すことによつて、より鮮明に「見えた」「見えた」事実は



同じ講座の院生と(本人後列右から2人目)

「見える」という状態を知つたことが、大学院の一つの収穫であった。と同時に、人間が一回り大きくなったような気がした。

研究室での生活

医学部総合薬学科 吉村 友彦

一九九三年春、緑多き西条キャンパスで、私たちのキャンパスライフが始まつたのである。気がつけばもうあれから四年。今、その四年間を振り返ると、いろいろなことがあつた。単位を必死で取つた一年。要領も分り楽になつた二年。専門的な分野に入り薬学らしくなつてきた三年。卒業実習に入り薬学一色となつた四年。



平成8年秋、霞サッカーでの記念写真

最近、医師の不祥事が何かとマスコミに取り上げられやすいが、学生生活で得た人間関係や学んだことをもとに常に信念を持って生きたい。

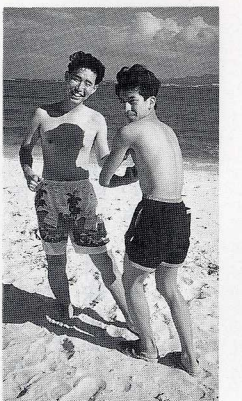
なかでも研究室に配属され、研究室での行事に参加することが多かつた四年では、いろいろなことがあつた。六月には研究室旅行として沖繩に行つた。空港を出た私たちがはものすごい暑さに驚き、ふと足元を見るとなんと自分の影がほほ真下に小さく映つていて、ここは南国なんだということを実感し感動した。



ずっと一緒



研究室旅行で行つた沖繩。万座毛で撮つた写真



調査のあいまに…(本人右)